

春日部市教育委員会

1 市の概要

春日部市は、不登校問題に対して、各校の相談室、市の相談センターや適応指導教室が中心となって積極的な対応を行っている。その効果もあり、不登校児童生徒は、市全体としては、年々減少している。しかし、中学生になると不登校は大幅に増加し、特に小学校6年生から中学校1年生になって環境が大きく変化する時に、不登校生徒が増加する傾向が見られる。

市内の立野小学校と大增中学校の両校においても、不登校問題は改善しなければならない大きな課題である。両校は、不登校の児童生徒に寄り添いながら、学校に目を向けさせる対応をとってきた。その対応の中で基本的な生活習慣の定着を図り、安心して学校生活を送ることができる環境を整えることが以前より共通の課題として挙げられていた。両校の特徴には、学区が1小学校・1中学校の関係であり、教職員集団が考えを同じくすることで、9か年間の一貫教育・指導が可能となる関係がある。そこで、小中での生活・学習環境の共通化を図ることで、中1ギャップなど不登校を生む要因を取り除き、不登校の減少と地域に誇れる“自立する15歳の育成”を目指し、今年度の「生徒指導における小中連携推進モデル事業」に取り組んでいる。

2 研究の構想

(1) 調査研究の推進組織体制

組織的・機能的に取り組むため、大增中学校の校長を委員長とした推進委員会を立ち上げた。メンバーは、両校の校長、教頭、教務主任、推進教員（生徒指導担当）、教育委員会（コーディネーター、担当指導主事）の10名構成であり、ここで①両校の取組で目指す学校像や児童生徒像についての検討、②具体的な取組内容とステップなど、取組についての大枠を検討し、研究の方向性を示した。また、より詳細な取組内容や方法については、両校の教頭、推進委員からなるCore study group会議で担当し、検討した内容を各学校に示した。さらに、市教育専門員をコーディネーターとして活用することで、取組内容の充実を図った。

(2) 研究内容

① 職員の交流

合同研修会、相互授業参観、出前授業、情報の共有化等

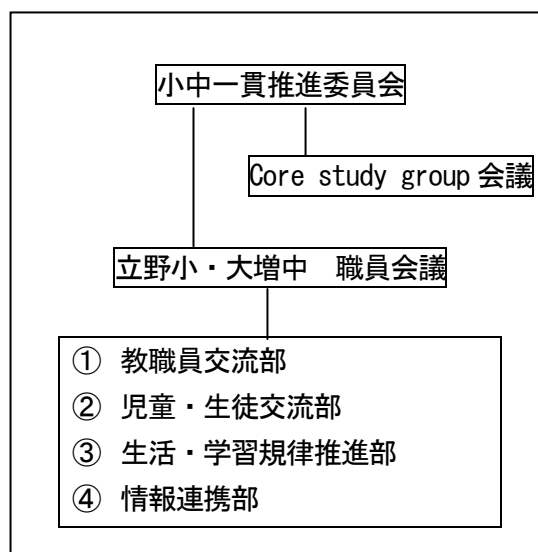
② 児童・生徒の交流

行事、ボランティア活動、学習会、部活動等

(3) 検証の視点・方法

① 不登校児童生徒数の状況

② 学級アセスメント（Q-Uアンケート）からの児童生徒の実態



③ 児童・生徒、保護者のアンケートの実施

3 研究の取組事例

(1) 小中一貫に係る人員の配置

① 立野小学校の場合

非常勤講師1名の配置（週1日・一日6時間勤務、5月～3月配置、推進教員の後補充や支援を必要とする学級でティームティーチング）

② 大增中学校の場合

非常勤講師1名の配置（週5日・一日4時間勤務、5月～3月配置、推進教員やその他の教員の後補充）

(2) 児童・生徒の交流

① あいさつ交流

両校はあいさつを指導の重点としている。そこで5月9日（月）から13日（金）までの5日間、大增中学校の生徒会本部役員が毎朝立野小学校を訪問し、6年生の児童や立野小学校の先生方とともにあいさつ運動に参加した。大增中学校の生徒も、日が経つにつれて笑顔で挨拶ができるようになり、立野小学校の児童も「目を見てあいさつしよう」という小学校の先生の呼びかけに、中学生を見ながら元気なあいさつをかえすことができた。また、2学期は、立野小学校の3年生以上のあいさつ名人の中から、中学校でのあいさつ運動ボランティアを希望した45名の児童が、11月1日（火）からの教育週間の期間に大增中学校を訪問し、あいさつ運動を行った。



② 部活動指導交流

大增中学校の陸上部員8名が、小学校陸上大会の練習を支援するために、小学校での練習会に参加した。中学生は、スタートやバトンの受け渡し、走り幅跳び等をわかりやすく指導し、小学生にとって実り多い時間となった。この技術指導を通しての心の交流は、子ども達に信頼関係を醸成する取組となった。



③ 小学校の運動会で中学校陸上部のリレー実演

9月24日（土）、大增中学校陸上部が、立野小学校の運動会に招待され、リレーの実演を行った。中学生の力強い走りは、児童や保護者を大いに喜ばせ、運動会を盛り上げた。結果的に、陸上部によるリレーの実演は、立野小学校にとって保護者の中学校理解につながる取組となった。



④ 小学校の音楽の広場で中学校吹奏楽部が演奏

10月31日の立野小学校の土曜公開日に開催された立野小学校音楽会に、大增中学校の吹奏楽部が参加した。大增中学校吹奏楽部は、日頃の練習の成果を小



学生やその保護者に披露し、児童の知っている曲の演奏、楽器の紹介、質問コーナーなど内容を工夫し、児童を大いに楽しませた。中学生からのあいさつでは「母校で演奏できることを大変うれしく思います。」という言葉があり、真剣に話しを聞く児童の目には、中学生に対しての尊敬の念が感じられた。

(3) 教員の交流

① 授業参観

両校の教頭、教務主任、推進教員、養護教諭が、定期的に両校を訪問し合い、授業も参観した。両校では共通テーマとして、“話を集中して理解しながら聞くこと”“グループで協力して話し合うこと”“丁寧に文字を書くこと”等を授業ルールとして、小中で協力して取り組んでいくことを確認した。今後は、学力に大きな差があるため、個に応じた指導の工夫や家庭学習を



中心とした学習習慣の定着にも、小・中連携の課題として取り組んでいくことを確認している。

② 出前授業

10月21日（金）に中学校理科教員による出前授業が行われた。6年生2クラスのみとまりで2時間行い、静電気を自分たちで起こし、体を通るかの実験内容だった。児童は中学校の先生とコミュニケーションをとりながら楽しく学ぶことができた。また、給食や

休み時間もいっしょに過ごすことで、中学校を身近に感じる機会となった。

11月21日（月）には、立野小学校の栄養教諭が中学校3年生で食育の授業を行った。身近な食品を利用して、生活習慣病の予防を考える授業は、子ども達にとっては興味深く、食生活を見直すきっかけとなる授業となった。

③ 中学校の生徒指導委員会への小学校生徒指導主任の参加

小学校の生徒指導主任は、中学校の生徒指導委員会に出席して情報交換を行った。会議で話題になる生徒は、小学校の時にも課題を抱えており、話し合いの中で生活規律の確立や人間関係づくりの大切さを改めて確認するとともに、小学校と中学校の一貫した指導内容の確認や情報の共有も行った。

④ 小・中合同研修会

8月26日（金）の小・中合同研修会では、小中一貫推進事業に関しての ア.小中の活動報告、イ.今後の活動計画、ウ.情報交換 などの内容に併せ、職員間の交流を深めるグループエンカウンターを実施し、充実した研修の時間とすることができた。



(4) 学級アセスメントの実施（効果検証）

① 実施方法

小学校5年・6年、中学校1年生全員で実施

② 実施の時期

第1回 6月 第2回 2月

③ 実施したことで見えてきたクラスの状況

(立野小学校の場合)

学級満足尺度結果のまとめから、学校生活満足群が全国平均を大きく上回った。

一方で、侵害行為認知群・学級生活不満足群・非承認群に入る児童も見られた。特に、非承認群に入った児童に対しては、日常生活においてできるだけ声を掛けて、認める場面を増やした。また、学級生活不満足群には人間関係をうまく築くことができない児童が見られるので、担任の支援が重要な要素になってくると考えた。要支援群に入る児童には、今のところ元気に通学していても、今後不登校につながる可能性があるため、できるだけ声を掛け、少しの変化も見逃さないで見守ることを心掛けた。

(大增中学校の場合)

学級満足尺度結果のまとめから、学級内に自分の居場所があり、学校生活を意欲的に送っている生徒の割合が高いこと、そして、学級内で認められていない生徒、いじめを受けている生徒や不安傾向が強い生徒の割合が全国平均に比べて低いことが分かった。なお、非承認群、侵害行為認知群に入る生徒も見られたので、これらの生徒については、学級での関わりを見直すことで、学級における自己存在感や所属意識を高める取組を行った。

(5) その他

① 先進校視察

6月21日(火)、両校の教頭と推進教員が越谷市立大袋中学校を訪問し、小中連携の取組について説明を受けた。特に兼務発令を受けた教員の計画的な相互訪問等による情報連携の効果が十分に発揮されており、子ども達の変容へとつながっていることを確認できた。テーマや目指すものの実現には、具体的な取組についての十分な話し合いや強い意志と具体的な計画の作成などの必要性を再確認するなど、先進校の取組から、今後両校が取り組むべき多くの示唆を得た。

② 情報発信

校内への掲示コーナーの新設、学校だよりとホームページの活用。

③ ガイダンスプログラムの作成・取り組み

発達段階を考慮して、9年間を見通したより良い人間性や社会性を育むプログラムを作成・実践した。さらに児童生徒の変容や取組内容等の情報も小中学校で共有する。

4 研究の成果及び今後の課題

(1) 成果

① 立野・大增という枠組みの中で地域に愛着を持てるようになってきている。特に、小学校6年生は、中学生との交流が増える中で中学校生活への不安が減り、中学校への親近感が芽生えており、中1ギャップの解消につながる状況が見えてきた。

② 交流を通して、9年間を見通して指導をしていくことの大切さを実感する、小・中学校の教員が増えた。

(2) 課題

児童・生徒の交流の機会や方法を検討すること、多くの教員が訪問できる条件整備をすること、保護者を巻き込んだ取組を模索することなどが課題となっている。